

加藤清也 (茨城県つくば市)

タイトル「泣いた、笑った」

お盆と年末に、僕が足繁く佐渡に帰る理由の一つに、母方の祖母に会いに行くことがある。高校時代に下宿していたこともあるし、両親と喧嘩した時はいつも世話になっていた。祖母は年々、動かなく、話さなくなる。四年前に転倒して足の骨を折った。今は完全に寝たきりである。頭ははっきりとしているが、ほとんど問いかけに対し返事をしなくなった。顎は変形し、小さく歪んでしまった。

今回の帰省には目的があった。祖母をお寺に連れて行くことである。熊本の叔母と相談し実行することを決めていた。日蓮宗として信心深い祖母はもはや仏壇の前に行くことすらままならない。参拝は、お迎えを望む祖母にとって唯一の願いだった。

祖母を車椅子ごと七人乗りのノアに乗せ、お寺に着くと再び担いで本堂に入った。親戚一同が、日蓮上人像に向かって頭をたれた。墓参りにいくかと問う叔母に、祖母は頷いた。

高台にある墓までの坂道を、車椅子に括りつけたロープを二人が引き、一人が車椅子を押して登った。途中、祖母の知り合いに出会ったが、祖母は一言も発しなかった。坂を昇り、墓の前まで来ると祖母は首をがくがくと震わせて泣いた。

「来れた、来れた」

とつぶやき、弱弱しく手を合わせた。

帰りは、行きを巻き戻しするかのように、バックで坂道を降りた。従兄弟が車椅子を支え、僕と叔父がロープを引いて坂の力でゆっくりと下りていった。坂の途中で、不意に祖母は笑った。笑って泣いた。久しぶりの笑顔だった。念願の寺と墓に参れたこと、必死になってロープを引く僕たちの様子や表情、ぞろぞろと歩く一族の姿。一体、何に対する笑顔だったのかは祖母自身にしかわからないけれど、それは寝たきりのあの部屋から連れ出さなければ絶対に見れなかったことは確かだ。

帰りしな熊本の叔父と今日のことを振り返って笑った。熊本弁でぼそぼそと話す叔父の言葉は半分くらいしかわからないけれども、僕はそのあたたかい空気が好きだ。